

# 湘南 国木田独歩記(一)

神野 幸人

(会員 鎌倉市台)

## 序 文

佐伯史談会第一二四号巻頭に「国木田独歩の足あと」とありて、佐伯独歩会の再発行を知る。

佐伯に於ける独歩の研究は、小野茂樹先生をはじめ多くの方々がなされているので、佐伯を離れて帰京した独歩の略歴と新婚・蟄居・療養・病床とて、逗子市・鎌倉市・湯河原市・茅ヶ崎市に寸居を置いているので、「湘南における独歩の足あと」を探ることにした。佐伯独歩会の寸助になれば幸甚である。

一、佐伯より帰京して

(一) 佐伯を去るの記

○明治二十七年七月二十九日(日曜日)

吾が帰国の期は迫りぬ。

対清事件にて開戦説紛々。朝野騒然たり。

二十七日の薄暮、坂本氏にて馳走せられ……。夜やや更けて車に乗り帰宅。市街より葛港に至るの間、里程殆ど

一里、四方まことに寂然。

車上瞑想して、人生の流転を思ひ、老翁の事など思ひ

つづく。

○三十日

昨日少年生徒九名を招きて、昼食を馳走し、半日を海水に遊び、少年等と共に面白く送りぬ。夜、教会に出席して感話す。

○八月五日

八月一日佐伯を出発して、二日の午後三時半頃三ヶ浜に着く、其夜は茲に一泊せり。薄暮松山を見物す。出兵の光景を目撃せり。

三日の午前十一時三ヶ浜を出発して午後四時広島に着く、直ちに乗りかへて九時帰国す。

戦場の報しきりに到る。

(八月一日対清開戦)

(2) 在京略歴 従軍記者

約一ヶ月両親のいる柳井に過す。

九月 三日 柳井を立つ

九月二日 佐伯の四少年、出郷の電報を

受け取り、途中合流すべく出立す。

九月 六日 宇品で一緒になった富永・山口を伴って

東京に着き、麴町三番地九に下宿。

(途中彦根の友人 大久保湖州を訪れてい  
る。)

九月 十一日 おくれて佐伯から到着した尾間・高橋

(後に並河姓)それに弟収二を加えて、牛

込区南榎町に転居。

六人で自炊生活を送る。

九月 十七日 国民新聞社に入社。

富永・尾間も民友社の發送係として出社し

ている。

九月二十三日 麴町区三番地に転居。

十月 一日 従軍記者として乗艦を、人見一太郎にす

すめられ承諾す。

十月 十日 麴町区平河町に転居。

十月 十三日 午後九時五十分新橋発西下、広島に向

う。

秋雨の中、収二・人見一太郎・佐伯から

の門下生・富永・尾間らが見送る。

十月 十五日 午前八時過ぎ広島着。

宇品港にて西京丸に乗船。

十月 十六日 朝六時 宇品出帆。

十月 十七日 朝 佐世保着。午後五時 大同江に向い

出帆。

十月 十九日 午前十時 大同江着。夕方 千代田艦に

移乗。

明治二十八年

三月 五日 呉に帰り、退艦。

三月 十三日 東京に帰着。国民新聞社に復帰。途中、

彦根に寄り、友人 大久保湖州、余所五郎

を訪ね、許婚 中島貞子を知り親しみ、

上京後文通したが断られ、四月大久保よ

り絶交される。

四月 十六日 「国民之友」編集に従事し始める。

六月 九日 日本橋釘店の佐々城院長、佐々城本支、

豊寿夫婦の従軍記者招待晩餐会に列し、  
初めて娘信子を知る。

豊寿は、仙台伊達藩の漢学者星雄記の三女で才媛のほまれ高く、本支と結婚後も、政治家とも交わり、キリスト教婦人矯風会の幹事として活躍した新しい女性であり、信子はこの母の才と美貌を受け、独歩が知った時、十八才であった。以後独歩の佐々城家訪問が繁くなり、信子との交際は急速に深まる。

七月 五日 芝区兼房町十四、柴田ツル方に下宿す。  
(注1) 並河平吉と山口行一の二人は不幸。病死。富永

徳磨は本郷牛込教会において牧師として名をあげ、著書、日記あり。尾間明は国民新聞広告長をした後、東京都の社会事業に尽くす。

(注2) 尾間明の思い出

「かまども無ければ釜もない書生生活で、神楽坂までパンを買いに行った。それが半斤一銭二

厘というひどいもので、ずい分質素な生活であつた。」

### (3) 恋愛 北の旅 結婚

独歩の憧憬する女性は、高潔・多感・多情・真挚・無邪氣にして且つ同情に富み、学と文を兼ねて、恋愛の幽邃・哀深・悲壮にして春月の如き消息を解する女性……何処にあるか。

(明治二十八・四・十三)

独歩は信子にあこがれの女性の姿を見出した。  
七月 十一日 吾が恋愛は清く・深く・永く・強からしめ給え。

彼の少女の愛を吾に与え給え……。

七月 十三日 昨夜、佐々城豊寿を訪ふ、十時まで談話して帰る。帰路、少しく狂気せり。或は狂気に非ざる可く。本気なるべし。然り本気なり。

七月 二十日 佐々城信子嬢との交情次第に深からんとするが如し。

恋愛なるやも知れず。

七月二十五日 昨夜佐々城氏を訪う、十時まで談話す。今夜も亦た至る。

幽愁暗影の如く吾が心に被ふ。

七月二十九日 昨朝佐々城信子嬢来宅ありて一時間半計りを一秒時の如くに過ごしぬ。嬢は釘店なる嬢のもとに処用ありて外出したる途に秘密を以つて立ち寄りたる也。

吾等は遂に秘密の交情を通ずるに至りぬ。之れ全く嬢の母豊寿氏が邪推よりして遂に嬢と吾とを駆りて茲に至らしめる也。吾等は恋愛に陥らざるを得ざるに強ひられつつある也。

束縛は却つて恋愛の助手のみ。

一昨夜嬢が送りたる書状は吾をして泣かしめたり。

嬢は眠り能はざる程に苦悶しつつあり。

神よ吾等を善しきに導き給へ。

清き高き強き深き恋愛に導き給え。

明治時代、若き女性が男性の下宿を単身で訪問するこ

とは希有のことである。信子も又大胆であった。

八月 十一日に八王子方面に遠出をしている。

日曜日記憶して忘るる能はざる日なり、とて国分寺下車。小金井まで人力車を利用し桜橋畔の老夫婦の茶店で休み、林に入る。

八月 十一日 林を貫いて 相擁して歩む

恋の夢路……

夏に林間に入り、新聞紙を布て坐し、腕を組みて語る。

若き恋の夢……

林を去るに望み、木葉数枚ちぎり、記念となして携へ帰りぬ。

八月 十六日・十七日と発熱の信子見舞ひ。十九日 午

前見舞つて更に薄暮に訪問している。

余は裏門より出でんとす。嬢は其の病余の衰体をかかえて送り来り、吾等二人、裏門に別れんとす。余、嬢を抱きて曰く、「速かに全快し給へ。」

嬢、余を抱きて答ふに、キスを以てす、と。

八月二十六日 此ごろの日記は恋愛の日記なり。われは書を読まず、文を草せず、ただ恋愛の樂しきうちに苦しき時間を、朝はめさめてより夜は床に入るまで、少しの間断もあらず暮らしつつあるなり。

この頃信子との結婚を決意した独歩は、北海道開拓の決意を固めている。尚北海道生活は六月二十五日 近頃、北海道移住、農業を営み独立、独行したしとの希望起りたり……とあり。八月一日……。昨日信子嬢来訪す。北海道生活の事は互いにその夢想を同くしたり……とある。

九月 十二日 信子とその友人で二人の同情者となった遠藤よきを誘い、塩原温泉に赴いたが後を追ってきた父本支と会見し、ふたりは一切を打ち明けた。ところが、当時、社会的評価の低い新聞記者との仲を喜ばずにいた豊寿夫人から手紙が来た。

その内容は独歩を怒らせるものであったが、一切を聞

いた本支は夫人と相談の上返事をしたいという。

しかし、十四日の朝、結婚を承諾させた。

そして万事解決したと信じて、

九月十六日 一人新天地を求めて北海道に向けて塩原を立つ。北の旅はあわただしかなかった。青森・函館・室蘭・札幌・空知太を経て歌志内。

九月二十六日 宿の少年を伴い空知川河岸を視察し、土地を選定した。

原始の気ただよう天地での二人の生活を夢見て、二十七日、午前十一時、札幌に帰った。宿には、豊寿夫人の非常な怒りを知らせる本支、遠藤よき、収二の手紙が来ていた。

その夜、信子からの、自殺を企てた事、その遺書、そしてアメリカ行きの決心をも書いた手紙に接し、急ぎ帰京した。

彼の北の旅の目的はやがて霧散したが、後年、名作「空知川の岸边」として実を結ぶ。

信子を失ってはすべてが空である。帰京した独歩は、佐々城家の説得と信子との結婚に全てをかけた。

徳富蘇峰、武越三又、遠藤よきの母・潮田ちせ、丹野直信氏の尽力の結果、豊寿夫人の説得も漸くうまく進んだ。

ついに佐々城家もあきらめたのである。

(信子は家を出て、遠藤よきの姉の夫、三浦逸平方に身を寄せていた。)

しかし、それにはつぎのようなきびしい条件が着いていた。

十一月 八日 今日徳富氏を訪ひ左の書を得たり。

一、信子等謝罪書に由り予て御申入れに相成候結婚之儀は認識致候事。

一、同人等少なくとも一両年は府下を立退き候様御談被下度事。

一、父母弟妹間の音信並に面会は拒絶致し候事。

右本人等に御談被下度候也。

佐々城豊寿

佐々城本支

明治二十八年十一月

徳富猪一郎殿

十一月十一日 午後七時 信子嬢と結婚す。

わが恋愛は遂に勝ちたり。

われ遂に信子を得たり。

植村正久の司式の下に、徳富君の媒介、竹越興三郎君の保証の下に、潮田ちせ老

婦の世話のもとに、吾が宅に於て、父及弟列席の上目出度結婚式を挙げたり。

佐伯を出でて一年三ヶ月である。

(つづく)

### 中ノ谷峠

弥生町と野津町の境にある峠。高さ二一六五<sup>ト</sup>。国道一〇号線が峠下を貫通。中ノ谷トンネルの長さ八九七<sup>ト</sup>。昭和三十八年(一九六三)開通。当初は有料だったが、昭和四十八年七月一日無料となる。(九州地名小辞典)